

「自動運転」がなにかと注目された今回の東京モーターショー。しかし、太田さんは「楽しいクルマが多くてワクワクした」と振り返った。また今回、大学生と一緒に見て回って、彼らの反応が興味深かったとも。クルマの魅力を変えて知るきっかけにもなった東京モーターショーをレビュー。

東京モーターショーに読者のみんなは行ったかな。振り返ればリーマンショック直後の09年のモーターショーでは、エ

コカーばかりでワクワクする要素がなくて楽しくなかった。今回はあれから様変わりした印象で、いろいろと夢が膨らんだ。

来場者は減少したが、楽しいクルマが多かった

もっとも業界的には、来場者数が前回（2013年）の9割程度の81万人で、新技術の提案や目を引くコンセプトカーの展示も弱かったという声も聞かれる。だが大方はそうだととしても、俺としては「スポーツ」「運転の楽しさ」をアピールしたクルマがまた登場し始めた印象を持った。そもそもクルマ好きなんてクルマ保有者の一割もないだろう。だから一割以上楽しさが見えるクルマがあれば、俺としては御の字なのである。

モータージャーナリストとしてよりも、ひとりのクルマ好きとしては「あれも欲しいなあ」「これを買ったらこうイジろう」と夢が膨らんだ。しかも今回、N



■文：太田哲也

CG（ネクストカージェネレーション）大学生プロジェクトのメンバーも引き連れて行ったところ、彼らのクルマを見る目が新鮮でそれも楽しめた。個人的には出て来ない夢物語よりも、明日運転できるかもし

いつもそばにクルマが。

れない現実的な夢がいい。最近、マスコミではもっぱら自動運転（完全自動操縦車）が話題を振りまいている。しかしカタチで表現しにくいこともあろうが、とくにこのショーで自動運転車が目立った印象はなかった。そもそも完全自動運転なんてものはハードはできても交通インフラなどソフトの問題で成り立つはずがないと俺は思っている（メーカーの開発者だって本音ではそう思っているはず）。

環境車に関しては、タイムイング良く（悪くか）VWのディーゼル不正問題もあってか、他メーカーも含めて全体的にディーゼル車の展示が少なかった。その一方で、欧州のレギュレーション変更に伴うCO₂の基準値が有利に働くようになったプラグインハイブリッド車が増えた印象だ。ディーゼルは今後プラグインハイブリッドに代わられ衰退していくのだから、この業界の変化の速さと激しさを考えさせられた。

と、いうまじめな話はこのくらいにして、クルマ好きの目から見た「太田哲也的目」がハイトになったクルマを紹介しよう。
S660&ロードスター 若者の反応に興味津々!
ロータリー復活のコンセプトカー、マツダ「RX-VISION」が展示された。デザインが個性的でターニングブルで回るとボディ曲面の反射光がなまめかしくうごめく。ロータリー復活の夢と重なって素晴らしい光景だった。経営面で完全復活したマツダだが、でも目の前の利益だけではない、こうした自分たちのアイデンティティを大事に考えていることに感銘を受けた。登場するまでにはまだまだいくつもハードルがあるだろうが、もし出たら俺は絶対買う。そして自他ともに「ロータリー好き」を謳う担当編集でもある編集長カトーも、たぶん買うはずだ。少なくとも二台成約！だ。

今年登場したスポーツカーとして、新型マツダ・ロードスターとホンダS660も展示された。今年のカー・オブ・ザ・イヤーでこの二台のスポーツカーが争ったこと自体も驚きだし、リーマン時代を思つた感慨深い。S660は軽自動車にもかかわらず「ここまでやるか」と思うほどボディ補強にこだわって、しかも本格的なミッドシップで作り手の熱さに驚かされる。では大学生の反応はというと、「もし買うとしたらロードスター」だと口を揃える。彼らにとって走り性能も大切だが、この一台で旅行もデートも出かけた。用途が限定されてしまうS660よりもロードスターに魅かれるようだ。それにS660は少し頑張り過ぎのデザインとコテコテな力の入り方が、らしい。もっと力を抜いて「素」に近い状態だったら多くの若者に受け入れられたかもしれない。そういう意味では、スキのブースが気になった。アルトワークスが初登場！にもかかわらず、ステージ上ではなく地べたに普通に置かれていたが、ショーカーとしては地味だが、

ガンメタに黒のホイールが格好良かった。アルトターボRSでもあれだけ楽しかったのだから、ワークスとなればかなり面白いだろう。S660のような「完成品」よりも、こういう自分で手を入れる余地がありそうな方がプラモデル世代の俺は好きだなあ。連れて行ったNCG大学生プロジェクトのメンバーたち

も「MTにはひかれます、これならMT免許を活用できる」と喜んでいました。俺自身、周囲の若者には「免許はMTで取っておいた方がいいぞ」とアドバイス（ときには強制もしくは脅し？）している立場上、MTがなくなったら困るのだよ。スズキが軽乗用車にもMTを出してくれることには



▲事前には出品を告知していなかった「アルトワークス」を急遽展示。價格的にも手頃で若者たちにも手が届きそうなMTを搭載したスポーツモデルということもあって、非常に注目度が高かった。

感謝申し上げたい。

若者にとつて二台持ちは到底無理だろうし、一台でいろんな使い方ができるこういうのがいいんだよな。最近「若者のクルマ離れ」がうんぬんされるが、アルトワークスみたいなのがいっぱい出て来たらそんなことはなくなると思うよ。若者のクルマ離れは若者自身の責任よりも彼らに手の届く範囲で楽しいクルマがなくなってきたことが要因だと俺は考えている。その歯止めには良いはず。よくぞ出してくれた。俺も欲しいぞ。

シビックタイプRは何しろ外観にやる気が満ちていた。これで田舎の実家に帰ったら「どこの子はレーシングカーで帰ってきた」とか噂されるんじゃないか。俺としては外観がもっと抑え目であって欲しかったが、先日乗る機会を得て印象が良くなった。FFスポーツなのに乗り心地が良かったのは電子制御ダンパーの効果とボディ剛性の高さ。走りも楽しく魅力的だった。

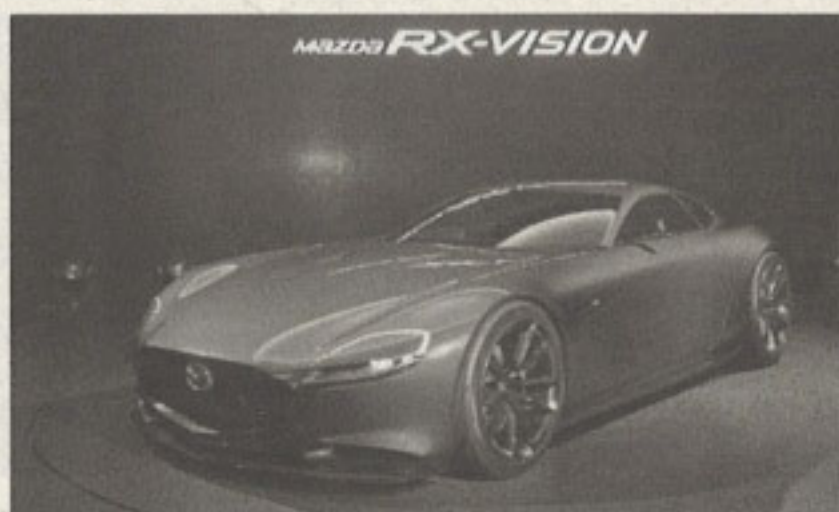
輸入車ではルノー・トゥイン

ゴに興味津々。最大の特徴はエンジンが後ろにあること、つまりRRレイアウト。魅かれるなあ。NCGメンバーも「ボルシェと同じですもんね」と興奮気味だった。

まだ乗ってないからわからないが、パワードリフトとかして遊べるかな。スポーティでないたちではないが、そのギャップも面白い。200万円を下回るらしいし、カフェレーサー的なアプローチでカスタムしたい。

こうしてエコカーや自動操縦の陰に隠れて（隠れたつもりはないだろうが）、あくまでも少数派、展示のされ方も多くは地味で地味。でもコツコツと、だてに確実にスポーツモデルが増えてきた。何より嬉しくもびっくりしたのは、メーカーがこうしたモデルが市場で求められていると思うようになったから出るのであって、それだけ多くの人が運転の楽しいクルマを望んでいるという事実だ。運転の楽しさを知る仲間が大勢いる。そう思ったことが、モーターショー

初日の朝一番にお披露目となったマツダ「RX-VISION」。デザイン要素が強いものの、マツダのDNAでもある「ロータリー」エンジンの復活を宣言しており、今後このスタイルがどう進化していくのが楽しみだ。



に足を運んで一番良かったことかもしれない。

事故を減らすために自動運転技術を進化させることも必要だが、運転の楽しそうなクルマはやっぱり見えていてワクワクする。そうやって夢が広がることも大切だよね。

運転の楽しさを知る仲間が大勢いる。そう思えたことが、東京モーターショーに足を運んで一番良かった。